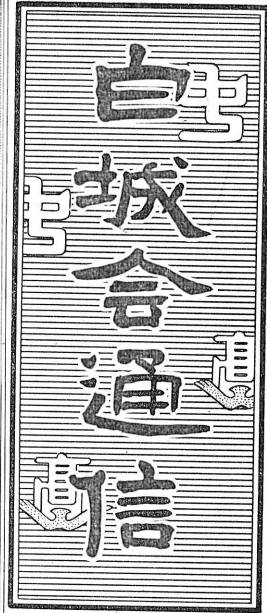




新装成った白鷺城



No. 1 昭和39年 7月

題字は空地純一氏

白城会本部
 姫路市伊伝居678
 姫路西高等学校内
 理事長 空地 純一
 編集人 尾田 龍
 橋 義康

<目次>

発刊にあたって……

……空地純一 1

古い伝統に立って新しい飛躍を… 井内喜久次 2

母校今昔……尾田 龍 3

今年も輝かしい卒業生の成果……西岡平八 5

白城会講堂どうなる？ ……石坂豊明 6

〔特集〕

栗田先生を囲んで… 9

支部だより ……25

本部告知板 ……26

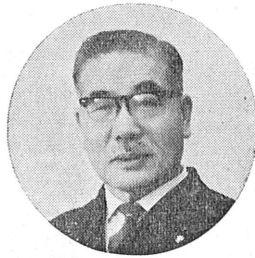
白城会文庫目録 ……28

白墨歳時記 ……山崎為久 29

西高生一その喜びと悲しみ……鳩川晏弘 30

発刊にあたって

理事長 空地純一 (第二四回卒業)



白城会が創立されてこの方最初のとして最大のもの、と申すといかにも大げさですが名簿と会報の発行が宿題となっていました

た。前者は特に校舎改築の問題ともからんでとり急ぐ必要もあり同窓諸君に特別のご協力を願ひまして間に合せのものではありましたが、出来上った時はさすがに嬉しかったも

のです。その後第二第三と版を重ねる度に段々と名簿らしくなってきたのは皆様ご承知の通りです。それにひきかえ、会報はいろんな事情で中々に実現せずと同様誠に歯痒い思いをして参りました。此の度おそまきながら機が熟し且つは各方面からの要望に応えるべく愈々発刊に踏切ることになりました。漸くその第一号をご高覧に供する運びとなりました。誠に同慶の至りに存じます。ご多忙中を特にこの仕事に専念して下さいました校内理事諸先生には衷心感謝の意を表したいと思います。ここに興味あることはこの第一号発

刊が、八ヶ年の月日と六億を上廻る巨費による国宝白鷺城の修築竣工と時を同じうしたことでありまして、校歌に応援歌にいつもお城の力と美をたたえてきた我等同窓として誠に感慨無量のものがあります。

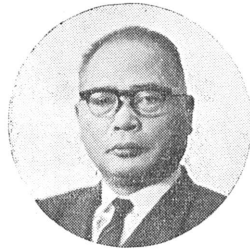
創刊号はご多分に洩れず、不慣れと資料の乏しさからすべての点で物足りなく見えましようが、幸い母校愛の精神に燃える一万数千名の校友諸君の親切なご批判とご支援により必ずや立派な会報に育つてゆくであろうことを信じて疑いません。何と申しても会報は読んで頂くものであります。そのためには戦前のように早く各地に支部を作つて頂き、本部との連絡はもとより愉快な支部便り、会員各位の動静や面白い出来事、研究や趣味嗜好に至る迄バラエティにとんだ記事をのせてご期待にそいたいと思います。よろしくご協力下さいませようお願い致します。

尚、この機会に、かねて懸案の白城会講堂の建設について一言添えさせていただきます。詳細な経緯につきましては、別稿石坂理事の説明にある通りでございます。その衝にあります私と致しましては、所期の目的の達し得なかつたことを誠に遺憾に存じ、白城会講堂建設のために御寄付いただきました諸

氏に心からお詫び申し上げる次第です。しかし、事情やむをえないところを御賢察願い新たに白城会館建設に懸命の努力を致したく思っています。白城会館にしましても、今まで

古い伝統に立って新しい飛躍を

姫路西高等学校長 井内喜久次



私は昨年四月就任以来、白城会の本部や支部の総会に出席し

まして、八十余年の歴史と伝統を持つ本校の先輩諸氏が社会の

御寄付願った分ではまだかなり足りませぬので、今後とも御無理を申し上げるか存じますが、その節は何分にも宜しく御協力賜りますようお願い致します。

は全く壮観でした。かくの如く光輝ある本校に在任し生徒の教育指導を担当するわれわれ職員は常にプライドを持つと共に責任の重大さを痛感して居ります。

現在本校の生徒数は三年生六学級、二年生九学級、一年生十学級で一三七〇名でありまして、昭和四十一年度は三〇学級一六五〇名の定員となる予定であります。兵庫県の高校で最も優秀な素質の生徒を收容することが出来、従って大学進学も良好な成績を維持して居りますが、将来生徒の学力の充実にもない更に成績が向上するものと大いに期待して居ります。

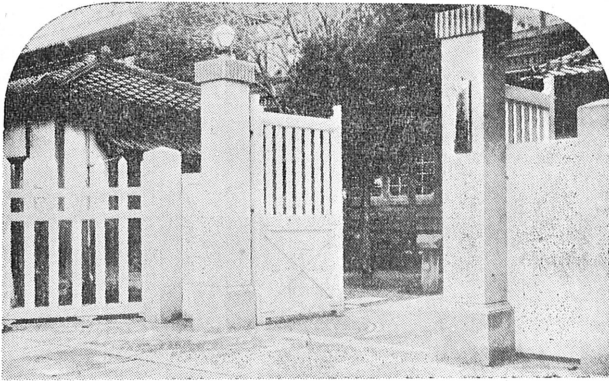
学校の施設は、昭和三十年度校地約一、二〇〇坪が拡張されると同時に、全面改築が開

始され、鉄筋三階建の南北二棟の校舎と体育館兼講堂が完成して居ります。更に理科施設の拡充と図書館生徒集会場の建設、旧講堂旧体育館の移築、水泳プールの建設、運動場整備等の相等多数の計画を持って居ります。これ等の計画を早急に実施に移し懸案を解決いたしたく努力して居ります。

本校はただ今、将来の発展の基礎を築くべき極めて重要な時期に当っているものと判断いたします。従って教育内容の充実と学校施設の拡充とに依り、古き歴史と輝しい伝統の上に時代に即応した立派な校風を樹立しまして将来の躍進に備えたいと念願して居ります。

従来白城会々員各位より母校教育進展のため物心両面の絶大なご援助をいただいて居りまして深く感謝して居りますが、今後とも格別のご高配賜りますようお願いいたします。会員各位のご発展を衷心よりお祈りいたします。

矢田賢亮先生（五五回）御逝去
昨春、加古川西高校より理科担任として母校に赴任された先生は、去る四月五日心臓マヒのため急逝されました。行年三十八。先生の御生前の眞摯さをたたえ、深く哀悼の意を表します。



かつての正門より見た旧姫中校舎

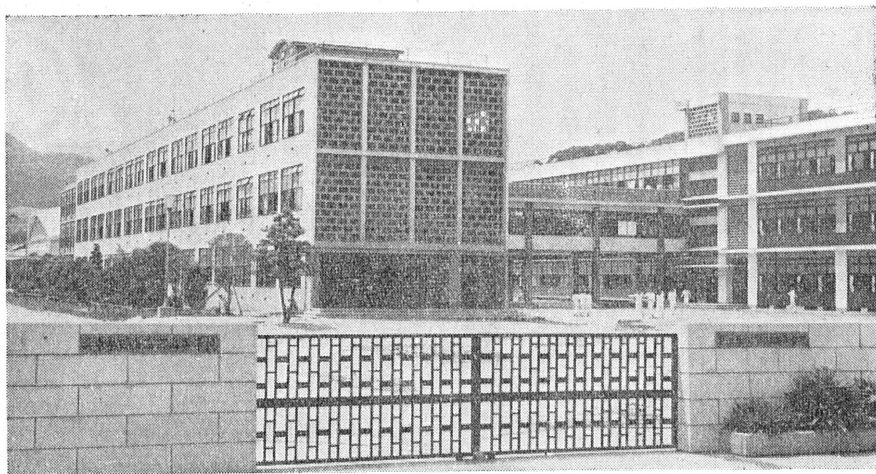
母 校 今 昔

校内理事 尾 田 龍 (第三六回卒業)

戦後の姫路しか知らない人には、戦前の姫

路は想像もつかないと思う。われわれが姫中の生徒であった頃は、二階町などの中心街にはいずれも古い昔ながらの店舗がならんでいておっとりとした静かであった。坊主町や五軒邸をあるくと時々琴の音がもれてきたり謡の聲がきこえてきたりしたものである。

その頃の姫路中学は質実剛健という校訓があつて大変きびしい学校であつた。小倉の制服に日清戦争の絵でみるような白いゲートルをつけ、教科書は白い風呂敷に包んで持っていた。先生や上級生に出あうと五十米も手前から脱帽して敬礼し、家庭で外出する時は必ず袴をつけ、映画館へはいったり、女学校の運動会を見に行ったのがばれると一週間の停学、女の子に手紙でも出したらまず放校は確実であつた。そういった空気の中で英語の単語を暗記し、代数や幾何に頭をなやまし、教練できたえられ、夏休にはいると飾磨の沖で水泳訓練があつた。全員の成績は印刷して学



着々新築されつつある西高校舎

年末に公表され、一教科でも出来が悪いと遠慮会釈もなく落第させられた。ゲートルの一番下のボタンを一つだけはずしてみたり、上衣のフックをはずしてみたりするのがせいぜいのレジスタンスであったし、特定の下級生をユースと称して可愛がる風習もながく続いていた。

卒業後はずっと姫路にいなかったが、終戦の年私は県立高女の焼跡へ赴任した。県女の生徒たちはモンペに下駄ばきで鉢巻をしめ、焼け残りの校舎の中で口もきかずに終日ジュラルミンのパイプをかかんたいたっていた。

まもなく終戦、やがて男女共学という破天荒な命令がでて、姫中と県女は折半交流ということになったのである。何度も何度も会議を繰り返した結果、職員も生徒もくじ引きで両方にわかれ、学校財産も等分することになった。昭和二十七年七月一日、姫中は男女共学の姫路西高等学校になり、県女は東高等学校になった。私はそのとき西高へ行くくじ

が当たって期せずして母校の教師になったわけである。

交流直後、旧姫中校友会をどうするかということが問題になった。生徒大会を開いた結果、満場一致で、われわれは卒業後は姫中の卒業生と同じ会の会員でありたいと希望した。卒業生の方は当時連絡のとりにくい中をあたるかぎりアンケートをとったり、又、理事会や総会でさまざま討議した結果、これも全員一致で西高出身を会員と認める旨の決議がなされた。しかし会の名前は姫中校友会では困るので、このとき白城会という名前に改められた。男女共学が実施されると、世間は興味をもって桃色事件が起るのを待っていたようである。しかし生徒たちは汚れた大人たちが考えているよりもっと純真で賢明であった。無責任な大人たちの期待したような事件は全然おこさなかった。ただ大学を卒業し、社会人になってから結婚した同窓生はかなりの数にのぼる。生徒の頃からの愛情を真面目に、大切にそだてていたわけである。これは同じクラブにいた人同志の場合が特に多い。戦後のけわしい世相の中で、変ることのない愛情をいだきつづけたこれらの人々はまことに見事だった。しかし最近はこのあま

白城会総会案内

— 全会員の御参集を乞う —

一、日時 昭和三十九年八月十六日(日)
午後一時半より

二、場所 母校新体育館

三、講演並びに余興

講演 桃井一男氏(桃井製網社長・
四十二回卒)

「最近の海外視察の感想」

余興 奇術 門脇政夫氏(多可郡八
千代町長・四十回卒・兵庫県
町村長会長)

四、会費 三〇〇円

恒例の白城会総会開催の時期と相なり
ました。暑い中にもかかわらず、例年多く
の方々の御参集を得ていますが、今年も
一層の盛況たらしむべく、諸賢の御参集
をお願い致します。特に若い方々は、せ
ひ母校で大いに青春の気を吐いていただ
きたく、御来校をお待ちしております。
なお、これをもって御案内状に代えさせ
ていただきます。

り聞かなくなつた。現在の生徒は異性を異性
として特別に意識することなくごく自然な交
際をしているように思われる。

昔の中学生と現在の西高生とをくらべてみ
ると本質はあまり変っていないようである。
旧制中学のきびしいしつけや上級生の威圧が
とりのぞかれてその点のびのびしているかわ
りに、大学入試のきびしさが別の圧力になっ
ている。もとは五年間でいくらか余裕があつ
たが、今は三年間で大急ぎでいろいろ頭へつ

今年も輝かしい卒業生の成果

校内理事 西岡平八 (第五〇回卒業)

めこまなければならぬのが気の毒である。
昔の姫中の校舎は老朽して危険になったの
でほとんど取りはらわれ、新しい鉄筋コンク
リート三階建の校舎が二棟できた。

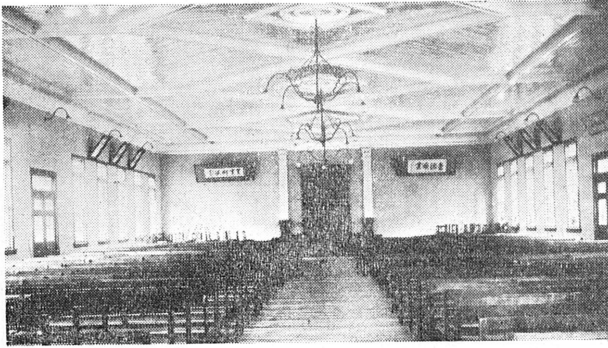
昼食後など校庭で男女の生徒がいりまじっ
て遊んでいるのをみると、どうも今の生徒の
方が恵まれた青春を楽しんでいるように私は
思う。もっともそのような時間にも仲間から
はなれて単語の暗記に夢中になっている生徒
もかなりいるのだが――。

明治十一年(一八七八年)創業以来、姫中
時代の卒業生、七、二二三名、姫路西高校に
改制以来、五、六三七名合計、一二、八六九
名の白城会員の中へ、本年の三月、三〇二名
の新会員を加えまして、白城会が質的にも、
量的にも、益々隆盛になりますことは、会員
の一名としてまことに同慶に耐えません。

かれた榮譽を引継いで後輩としての責務をは
たしてくれましたので、その輝やかない実蹟
を報告させていただきます。

さて今春の新入会員は、先輩諸氏の伝統を
受継ぎ各方面に立派な実績をあげ、先輩の築

卒業生中、ただちに実社会に入り、就職を
希望したものは、全員がそれぞれの希望先に
就職を決定し、各分野に進出「習性と教養の
豊かな人物に」という在校時のモットーを活
かし、各職場での職分を守り励んでいます。
一方進学面でも、案じられた失敗もなく



なつかしい旧姫中講堂の内部

各方面に大いに進出しました。中でも、女子の進出は著しく、みごとに難関を突破し、三名の女子が東大合格の榮譽を獲得しました。国立大学一四四名、公立大学九三名、私立大学一五六名、合計三九三名がそれぞれの希望大学に合格しました。この輝やかなしい榮譽も一朝にして成ったものでなく、各人が母校在

校時に研鑽努力その実をあげたものであることは勿論、母校奉職の各先生方の並々ならぬ御努力のたまもの、結晶であります。全国主要大学への合格者数を具体的に記しますと

- ◆東北大 1 ◆東京大 6 ◆京都大 33 ◆東教大 1 ◆お茶の水 3 ◆名古屋大 1 ◆大阪大 10 ◆神戸大 49 ◆奈良大 2 ◆岡山大 6 ◆広島大 3 ◆長崎大 2 ◆名工大 3 ◆京学芸 3 ◆阪外語 4 ◆阪学芸 7 ◆奈良学芸 2 ◆和歌山 2 ◆鹿児島大 2 ◆兵農大 9 ◆姫路工大 15 ◆神商大 3 ◆大阪女大 3 ◆静岡薬大 3 ◆名市大 2 ◆京府医大 2 ◆大阪市大 3 ◆横浜市大 2 ◆大阪府大 1 ◆高知女大 2 ◆姫路短大 27 ◆京都府大 5 ◆神戸外

白城会講堂どうなる？

校内理事 石坂豊明 (第四回卒業)

昭和二十三年学制改革以来姫路西高等学校は姫中の歴史と伝統を受け継ぎ、職員生徒一致してその名声をはずかしめぬよう努力した結果、県下はいうまでもなく全国的にも優秀

- 大 5 ◆慶応義塾 10 ◆中央大 2 ◆立教大 3 ◆早稲田大 3 ◆東京共立 2 ◆津田塾 3 ◆東京女大 4 ◆日本女大 2 ◆同志社 17 ◆立命館大 6 ◆同志社女大 6 ◆関西大 3 ◆阪齒大 3 ◆関学院大 50 ◆甲南大 9 ◆神戸女大 5 ◆武庫川女大 3 等、その他多数の大学に合格しています。

卒業生三〇二名中、就職生四一名を除き六一名の受験生中、大学合格者実数二二三名……九〇・七%の高率を示しました。この大学合格率は例年高率を確保してまいりまして昭和三十六年度八五%三十七年度八六%、三十九年度九〇・七%とのびています。紙面の都合上、以上で母校近況報告とさせていただきます。

校として、その名を知られて居りますが、十年前の校舎は五十余年の風雨にさらされて、四方から柱で支え、教室内には天井を支える柱がならんで、生徒の生命さえ、危険な有様



現在講堂として兼用されている新体育館

でありましたので、終に予算一億一千万円、その中、地元負担金四二〇〇万円、六期にわたる総改築にかかりましたが、昭和三十年に第一期の工事を終りました当時は、第一、第二期工事の地元負担金一六〇〇万円は生徒の積立金及び姫路市当局の援助により完納したものの、残余の二六〇〇万円は全然成算な

く第三期工事以下の成算は全然なき有様でした。

そこでわが白城会におきましては、再三協議の結果姫路西高等学校校舎改築後援会の主体となって、講堂建設資金一五〇〇万円を負担し、白城会講堂としてこれを建設寄附すると同時に、その資金はそのまま、地元負担金に繰入れ第三期以下の工事を推進することに決定し、三十二年六月を目前に募金を始めたのが昭和三十一年十二月二十日であります。

以来後記の表の通り、多数校友の御厚志と幹事諸氏の御努力により募金額は現在までに六〇三万円、利子を加えて約六八〇万円に達したのであります。募金にかかった折しも襲った経済不況、又、県下の老旧校が多数改築に割込んだために工事が隔年となり、第六期の講堂の工事が先に延びたこと、その他の事情が災いとなり、目標額に達せぬまま、募金が停頓しておる状況であります。

所で昨秋第五期の体育館が完成し、本年三月は番外の急増対策としての六教室の工事も終わりましたので、いよいよ懸案の白城会講堂の番となったのであります。

しかしながら講堂を含む全工事を果がして地元はその二割を負担し、白城会はその地元

負担金の一部一五〇〇万円を募金する代りに講堂に白城会講堂の名を冠するという構想は、白城会が単独の講堂は建てぬ方針になった事、又生徒数の増加と建築費の高騰により、現在会員を収容する講堂を建設するには最低三九〇〇―四四〇〇万円を白城会が負担せねばならぬ事、及び、生徒増に伴う普通教室、特別教室、図書館の新增築のために講堂の予定地がとられること、白城会の寄附能力などを考え合せた結果実現困難なことを認め、一月十五日の理事会及び二月十六日の幹事会において次のように対策が決定せられました。

- 1 白城会講堂は実現しがたいので二五〇〇万円を白城会館を作る。
 - 2 会館は一三〇坪程度とし、中、小集会室、資料室、宿泊室、事務室、簡易な炊事設備、手洗いを附属させ、会員の集会、宿泊及び中心校として母校に不足している小集会場にあてる。
 - 3 会館は単独とせず、一階食堂、二階図書館、三階を会館として外観の壮大を計り南新館の東に作る。
 - 4 募金を再開する時期方法は着工の時期と関連し追って協議する。
- 思えば貨幣価値のはるかに高かった十年前

呼びかけに応じて白城会館建設の為に貴い御寄附をいただいた校友の心中を思うとき、そのお金が活きなかったことをお怒りの方もあろうと存じますが、この資金は、何回となく育友会に貸しつけ、それがその都度の地元の負担金に繰入れられて、今日の立派な校舎が完成しましたわけで皆様の御厚志が活かされその一半の目的は達せられたのでありましてこの資金が無かったら育友会は他から苦心して金の借入れをしなければならなかったわけですからこの点何卒御諒承を得たいのであります。

この上は九〇名で四十七万円をお集め下さった四十五回や、はるばる九州から不自由な体を附添いの人に助けながら三度、計一〇万円の尊い寄附金を母校に届けて下さった二十一回の松崎先輩等に続かれて、所期の一五〇〇万円の募金が達成せられますよう、校育諸氏の御協力を重ねてお願いする次第であります。

~~~~~  
 母校永年勤続者の異動 (39年度分)

- 八木光表先生 (退職)
- 脇谷義郎先生 (県立姫路東高校々長に)
- 大西正一先生 (四〇回・県立赤穂高校々長に)
- 西牧茂夫先生 (四二回・県立龍野高校教頭に)

| 卒業回数 | 寄附者数<br>人  | 合計金額    | 卒業回数    | 寄附者数<br>人  | 合計金額      |
|------|------------|---------|---------|------------|-----------|
| 1    | 1          | 3,000   | 42      | 20名及志<br>有 | 186,000   |
| 5    | 3          | 42,000  | 43      | 43         | 260,000   |
| 8    | 3          | 9,000   | 44      | 23         | 93,000    |
| 12   | 4          | 110,000 | 45      | 90         | 477,000   |
| 13   | 5          | 56,000  | 46      | 37         | 157,300   |
| 15   | 1          | 3,000   | 47      | 6          | 18,000    |
| 16   | 6          | 33,000  | 48      | 48         | 144,000   |
| 17   | 2          | 6,000   | 49      | 10         | 88,000    |
| 8    | 1          | 3,000   | 50      | 53         | 300,500   |
| 20   | 2          | 6,000   | 51      | 54         | 267,500   |
| 21   | 18         | 176,000 | 52      | 49         | 191,000   |
| 22   | 7          | 61,400  | 53      | 47         | 194,000   |
| 23   | 9          | 224,000 | 54      | 12         | 60,500    |
| 24   | 13         | 66,000  | 55      | 21         | 56,000    |
| 25   | 11         | 44,000  | 56      | 29         | 51,000    |
| 26   | 0          | 0       | 57      | 47         | 200,000   |
| 27   | 19         | 15,000  | 58      | 7          | 25,000    |
| 29   | 3          | 9,000   | 59      | 13         | 37,000    |
| 30   | 18         | 135,500 | 西 2     | 3          | 9,000     |
| 31   | 29         | 201,000 | 西 3     | 5          | 20,000    |
| 32   | 22         | 119,000 | 西 4     | 22         | 52,000    |
| 33   | 19名及志<br>有 | 130,000 | 西 5     | 22         | 24,000    |
| 34   | 47         | 168,000 | 特 1     |            | 30,000    |
| 35   | 20         | 176,000 | 龍田紡 K 計 |            | 300,000   |
| 36   | 31         | 122,000 | K 合計    |            | 6,030,400 |
| 37   | 28         | 160,000 | 利子      |            | 843,464   |
| 38   | 11         | 204,000 | 総合計     |            | 6,873,864 |
| 39   | 24         | 87,000  | 募集費     |            | △ 73,397  |
| 40   | 23         | 161,000 | 現在額     |            | 6,800,467 |
| 41   | 27         | 137,000 |         |            |           |



# 特集 座談会

## 栗田先生を囲んで



△出席者▽

栗田肅夫先生(3)  
空地純一理事長(24)

佐々木米行理事(32) 高橋秀吉(26) 水田弥太  
郎(27) 尾田龍(36) 長谷川隆吉(40) 石坂豊明  
(48) 西岡平八(50)

### 秀才続々と名門姫中へ

去る昭和三十九年二月十六日、白城会館建設をめぐって幹事会が行われた後、前白城会理事長栗田肅夫先生を神戸からお招きして、座談会を催しました。先生は姫中第十三回の古い卒業生であらせられ、同時に母校の教師として多年にわたって後輩を御指導賜わり、はたまた応援歌「鷺山に秋の夜はふけて」の作詞者として、まさしく姫中・西高を通じて白城会の文化財的存在であらせられます。ここに、その有意義な、そして懐かしい母校懐旧談をテープ録音から筆録して全文掲載致しました。

なお、先生は現在、神戸市東灘区住吉町九郎左衛門新田三八一の御自宅で八十才の御老令をおすこやかに養われています。

尾田 それでは私が司会させて頂くことになりました。どうぞよろしく願います。今日は栗田先生を中心にしていろんな昔の先生の思い出話を聞かせていただきたく思います。実は(それを申し上げなかったのですが)白城会から近々に校友誌を出すことに予定しておりますので、それに完全に収録出来るかど

うかはわかりませんが、今日のお話を大  
体校友誌に載せさせていただきたいと思っ  
てお願ひするわけです。どなたからでもお  
話を出していただきたいと思ひます。なお私  
予定もあまり考えてなかったのですが、まず  
最初に先生が姫中の生徒であられた頃の、変  
った先生や生徒のことで、我々の誰も知らな  
いことをお話し願ひしたいと思います。

栗田 私が入りましたのは明治三十年、卒  
業したのが三十五年で第十三回の卒業になっ  
ています。その時分入りましたが何人かよ  
く覚えませんが、百名か八十名位でなか  
ったかと思ひますが、卒業する時五十六名に  
なりましたが、その半分が皆上から落ちて来  
た連中で卒業する時に六年経過したものが半  
分以上あったようなわけで、先生方も『この  
組はうるう年やな』といわれて……(笑声)

それから私達のクラスは、うる年会というこ  
とにしてしまつたくらい学校の中の学業が難  
しかったわけです。愈々しているわけではない  
けれど二年生時代に National Reader-4, Uni  
on Reader-4 こういう風なむこうの教科書を  
そのまま教えてもらっていたわけです。漢文  
でも勿論向うの本をやるし、数学も何もかも  
学科は皆むつかしかったものだから、自然

ちょっと怠けると落第してしまうというわけで、卒業する時に半分が落第生の集りだったというわけです。けれど皆よく勉強しておったので、昔から姫中は天下の名門と云われている通り、創立した時分は兵庫県にはどこにも他に中学がなく姫中だけだったんです。それから後に遙かに遅れて神戸一中が出来ておるわけです。従って兵庫県の南は淡路から北は但馬丹波の方面から皆笈を負って姫路中学に集って来るわけだから随分たくさんのお名士が出てくるわけで、まあ政治家でいえば、永田青嵐これは拓務大臣、鉄道大臣をやった後に東京市長をやった人、そういう人をはじめ学者としては三上参次、東大の国史学の權威、それから辻善之助、これは仏教史の權威、東大教授、それからずっと後になると和辻哲郎、これが五年生時分に一年生だったものでよく一緒に会をしていたりなどしていたのですが、後に文化勲章を貰った人です。今では京都大学の名誉教授になっている駒井卓博士、現在東大の教授である結城令聞、印度哲学の權威であるし、農大の教授である山本修太郎、それから前に東大の教授であった土方成美博士、こういうような優秀な教授をたくさん出しております。私らが学生時分はど

ちらかというど質実剛健一点ばりで、学校の校風といえば質実剛健というのでしょうか。ずっと後に三上参次が質実剛健と書いて新しい講堂に額として掛けておったことがあります。この質実剛健が根本気風でしょう。小倉の洋服に黒いボタンをつけて白いゲートルを巻いて白い風呂敷に教科書や弁当を包んで学校へ行ってました。勿論その時分自転車などははやっていませんから、同級生などの形やあの方面から三里もあるところをわらじ穿きで朝早くから暗いうちに歩いてきて市川の所までくると夜が明ける、そしてそこでわらじを脱いで靴に穿きかえて京口の学校へやってくる。田舎から来る連中はそんな風でやってくる。町からくる者はそんな風でやってくる。服装だけでも、そんな服装で来ましたが、服装だけについてみてまことに質実剛健という名の通りだと思ふわけです。それで毎月必ず不意に遠足というより行軍に出かけるわけです。その時は風呂敷包みから教科書を出して弁当をいれて出かけるわけです。弁当は柳行李の弁当と決っていたのです。おつゆ気のものはいれられないわけです。それを風呂敷に包んで背中に背負ってそしてすぐに何時でも行軍に出られる態勢で日常行きよったで

す。だからして、不意に行軍があって、何の用意がなくても何所へでもゆける。そして、行軍の帰りしなに、市川の方へ帰ってくるのたいに京口の校舎まで市川橋から走って帰るのが慣わしやっただんです。それから時には市川橋の上を通らんと水の中をバタバタ渡って帰ってくることもある。それから昼の昼食の休憩時間に、京口から城南練兵場まで行ってそのぐるりを、ずい分広いですが、そのまわりをずっと三回ぐらい廻って帰ってくるものがあつたりして自然体も丈夫になつてくる。山登りも始終させられるし、身体も丈夫になる。気性も自然ごく地味な気性になるというわけで、実際質実剛健という名ばかりでなく、服から行動からそういう風に鍛えられてきたものです。私らの入った時の校長は岡源介校長先生ですが、三年生頃に永井道明先生が校長に来られました。ついでにその時の月謝を云うと授業料が六十銭だった。そして三年生の時になって漸く一円にあがったのですがそんな時代です。

西岡 その時分お米とかお酒とかいっつう物価、他の物との物価の比較はどうでしたか。

栗田 ああ米の値段はよく覚えませんが、おまんじゅが一つ二厘ですな。(ハァー笑声)

二銭もってゆくと山盛り買えよったんです。(手まね)ですからお祭りの小遣という二銭とか五銭でした。十銭貰えば大喜びでした。

高橋 弁当のおかずなんかはどんなものでしたか。

栗田 弁当のおかずは梅干の人が半分あるですね。後半分は漬物を入れたり、それから極くとび切って上等で玉子焼が入る。

高橋 にぎりめしなど持ってゆきませんでしたか。

栗田 いやみな柳行李でした。きまつてるんです。

尾田 瀬戸先生がやはりその頃来られたのですか。

栗田 私が入ってから後に来られて、私も先生に主任をしていただいたことがありません。(尾田『そうですか』)だからこの間亡くなられて参った時恩師として参ったのは私一人でしょう。大勢会葬者があつたけれど、みなそれは息子さんの大和紡の社長さんのおつき合いであつたと思います。本当の昔の生徒が会葬にまいったのは私一人であつたのだと思います。おかげさんで私も八十になつたから、八十になつた生徒が(笑声)先生の告

別式にまいるということは非常に……(声、むしろめでたい事ですな)

### 応援歌「鷺山に秋の」生まる

西岡 今でも歌っておりますが「鷺山に秋の」という歌ですね。あれ先生のおつくりになつた詩ですが、何時頃お作りになつたのですか。

栗田 ええ私が新校舎へ来てからの話ですからね。

高橋 私らが歌い始めたんですわ。

空地 私が卒業する時はまだなかつたんです。

尾田 ああそうですか。

高橋 先生の時はなかつたんでしょう。そうですね。うすると三年位だつたかな。

水田 二十回卒業の山崎先生の時に變つたという話でね。(註・今の山崎先生の父上が二十回卒で、その時京口から伊伝居にかわつた)

栗田 あれは明治四十四年位ではないかと思いますな。

高橋 私が明治四十五年にここへ入つてゐるんですわ。それから後やから大正になつてからですわ。

栗田 ああそうですか。

高橋 あれは応援歌ですか。

水田 応援歌、応援歌。なかなかいいお歌やからね。

高橋 あの時から野球や庭球の運動が盛んになりかけたんです。それで先生は仲々若い時から文学者でね。近く出来ます近代播磨文学史に先生は登場してです。

西岡 あの歌の文句に出てくる「桜の葉風そよそよ」とについてはですが、あの頃のおもかげの桜の大きな木がなくなっているのが残念です。

栗田 なくなっていますね。もう少し早く空中から撮影しておられて旧校舎の桜の映っている所があればよかつたのですがね。

西岡 あの歌をお作りになりましたのは、姫中が野球に強いとか何か当然の必要に迫られておつくりになつたのですか。その辺のいきさつをどうぞ。

栗田 そうですね、それはね。姫路中学は昔からこの地方としては強いんです。それは相手が姫路師範、野球をやつたのは姫路師範だけですわ。姫路師範へやりにゆくんです。グラウンドはあちらの方が広いですから。それはまあ一勝一敗。それから庭球が相当強くて

相手は姫路商業です。これは姫商がなかなか強くて、敗ける事の方が多かった。(笑声)  
高橋 負けたいうて旗を倒して帰りよるのをよう見ました。

栗田 姫商の方が姫中へやってくると非常に応援がうまいんです。小さい子がその時分どこでも手拍子をもった拍手をやりはじめの頃で、珍らしかったのですが、それを器用にやるのです。所がこちらの方は取けてゆく、よけいとはがゆくなくなってしまつて『何とか先生。何とかしかり応援するようして下さい』云うてね、係の連中が言ってくるから、作ろうやないかと言つて作つたのがたくさんあるけれど、一番よく歌われたのが「鷺山に秋の」です。これは当時一高へ行つていた井原虎藏君(二十一回)でね。一高の寮歌もその時分全国にはやつていた。「春爛漫の花の色」それから「あゝ、玉杯に花うけて」あの歌が老いも若きも歌つていた時分です。で一高の寮歌など作曲する井原君に頼もうというて作曲して貰つたんです。

尾田 井原さんというのはこの卒業生ですか。

栗田 この卒業生です。

尾田 そして一高寮歌など作曲していた？

栗田 ええ、やつていたんです。そういう寮歌をつくる様な人はたくさんいますよ。一高のね。

尾田 井原さんというのは、そうですね。

西岡 あの歌は今の生徒も皆歌つておりますから、恐らく今後もずっと続けて歌われると思いますね。

栗田 この間も龍野の田中さんというお医者さんから手紙が来て、自分らも学校時代にあれを口ずさんで学校に行つていて思い出が多いから、達者なうちに一つ書いてくれいうて。で画仙紙を送つてこられたんですが、まだよう書いておりませんけれど。

空地 田中君が二、三年前に手紙をよこしましてね。あの歌碑を作りたいから寄附を募りたいと云つて来たのですが私の方から『今講堂の寄附に困つてしまつています。今それに寄附を出された人は講堂に出さないかも知れない。趣旨はよく分つているから、講堂の方の寄附が余るかどうかわらないけれど、その一部を割いて白城会でその歌碑を作つてもよいと思つているから暫く待つて呉れ』と言つたと『そうして貰えればよいから』という返事だつたんです。

尾田 そんな話もありましたので、白城会

からも先生に紙をお送りしお願ひしたのですが、田中さんからも送りましたですか。

栗田 来ています。

尾田 これはどうも。

栗田 一寸眼がかすんでいたのでね。で字を書くとき昔の様に筆鋒がふるえなくて大きい字の下が小さくなつたり、ゆがんだりするものだから二の足を踏んでいるのですが。

質実内に替わえて剛健ここに

我立てり！

高橋 質実剛健というのはその頃の風潮でもあったと思うのですが、校長先生では誰か力をいれられたのですか。

栗田 やはり小森いう校長さんが若くて二十幾才かで校長になつて来た人ですが、鹿兒島の人でね。この人がやはり鹿兒島の氣風でしような。その次に校長になられたのが岡源次先生といつて、これは札幌出のやはり精神的な面の強い人でした。

高橋 その当時、軍隊はもう十師団になつていましたか。

栗田 いや未だ師団になつていない前です。その次の永井道明校長が又実に運動体育

に熱心な方ですね。自分で高い梁木の上に立って全校生に『気をつけ』と云って号令をかけるような人でした。

高橋 あの人は軍人ではなかったのですか。

栗田 あれはそうでなくて、東京高師出の方でした。

尾田 私は先生の晩年にお目にかかる機縁がありましたね。永井先生がすっかりやめられてから本郷の駒込中学の校長をやっておられると聞いてお目にかかりましたが、その時の話には、夢前川を渡らせていたら、小さい生徒が流されそうになってあいつには参ったという話をしておられました。(笑声)

空地 永井先生がスエーデンかどこかへ視察にゆかれて帰って、姫中へきて講演されたんです。朝、朝礼をする台の上でモーニングを着たままでこうして手を振ってやられたことを今覚えてますよ。

栗田 その姫路中学時代の体育教育がね、非常に効果をあげたとみえて姫中が体操の模範学校になって文部省からわざわざ撮影に来たことがあります。姫中で効果があったので文部省から欧州に派遣された。そして向うでヨーロッパの各国の体育を視察して帰られて

そして今度は母校の東京高等師範の教授に広められた。そしてスエーデン体操を日本中に広められた。

空地 小柄な人でしたね。

栗田 いえ大きな人でした。そしてそういう校長さんやからして校長室におさまっている事は殆どなかったですね。修学旅行でも各組各方面に分かれて行くと、朝は赤穂の城頭で一年生に会って激励しておられるかと思うと、あくる日は六甲山の上で三年生の遠足隊を激励する。その次には二日程すると高野山にあがって行って五年生の遠足隊を激励するといったやり方やったです。身をもって範を示して生徒を率いてゆくやり方でした。(ほう)

高橋 すると、先生の御入学の時は小森先生ですか。

栗田 いや、岡先生でした。

高橋 それから途中から永井先生、そう、では岡先生は永くはおられなかったですね。その方はどういう特徴のある方ですか。

栗田 ごく温厚な紳士的な方ですね。けどこんこんと講堂で話をされる時には生徒はしんとして聴いているような精神的な方でしたね。

高橋 その当時の先生にはどのような方がいらっしやいましたか。

栗田 先生では、当時、津田、飯田、小野田という田のつく三人の先生が勤続二十年になられて生徒、今の生徒会やね、金を出しあって金時計を贈ったです。これを三田先生と総称していただきます。みんな非常にやはりまじめな先生ですな。

高橋 先生の入学時は中学の制服はあったのですか。

栗田 ずっと前からありました。併しやはり小倉服ですね。黒ボタン白のゲートルでした。

高橋 白風呂敷は私も白風呂敷で通したのです。だから私の卒業が大正六年ですから……

空地 遠足の時は白風呂敷に弁当を包んで肩にこう掛けて。

尾田 春山先生などもまだおられたわけですか。

栗田 いや春山先生というのはずっと私らの入る前です。七、八回生の頃まで春山先生春山乙彦といったら播磨の三山と云われた学者ですね。その人の息子さん春山茂樹といつて京大の教育学の教授にられました。

尾田 それでは先生は大学を出られてすぐこちらへ戻って来られたのですか。

栗田 すぐ戻ってきました。

### 盛んであった課外活動

尾田 それでは、先生になられてからの色んな記憶に残る大きな出来事とか、先生や生徒の変わった方や優秀な方だとかについて、まあ優秀な方は大分ここにおられますけれど。

高橋 先生になられたのは何年ですか。

栗田 明治三十九年です。

高橋 日露戦争の終ったあくる年ですね。

栗田 そうです。

高橋 先生が母校にお帰りになった時の母校は勿論京口にあったのですね。その時分の生徒はどういうことを楽しみにしていましたか。

栗田 やはりその時分もね、学校の校内に談話部や体育部なんな色々あって、今で言うならばクラブ活動、そういうものがありましたね。

高橋 文芸部とか美術部などもありましたか。

栗田 はあはア、そして昼飯は控室でみんな弁当を食べるから全校生徒が会食、そして

その控所が改築になって、それからクラス毎に敷居が出来てしまったんです。そして広い食堂が無いもんじゃからして、ここで立ってみんな弁当を食ったものです。神戸一中がやはり立ち弁当で、昼飯の時は運動場どこでも好きな所へ行って立ってたべっていました。

西岡 今でもやっています。

高橋 その時の在校生で寄宿舎の生徒も相

当いたですね。

栗田 勿論いました。そして一週間に一べ

んだけ寄宿舎の食堂で全校生徒が会食する。

その時には先生方が三人づつ交替でいろいろ面白い話をして聞かせる。そして卒業式が済んだ後には、そこで全校生徒の送別会が行われ、皆隠し芸なんかやってなかなか愉快やっ

たです。

高橋 私の時分には弁論部が盛んでね。弁

論大会なんかよくやったものですよ。

栗田 清瀬君なんかも、あれは十二回の私

より一級上の十一回の卒業生で、在校時分は極くさわやかな弁論をしようとしたのですが、あんまり始終演壇には立たなかつた。けれど

も時々立って話をする演説が極めてさわやか

でよい弁論をしようとしたものです。

空地 私らの時は栗田先生が受持になって

下さってね。教室で弁当を食べた後で、ず

っと並んでたんばをぐるぐるまわりまして

ね。あぜをね。

高橋 そうそう、今日は散歩の日、今日は読書の日というてね、そして常山紀談いうのをよう読まされました。

空地 二宮金次郎のあれを読んだり。

西岡 いわゆる輪読の形式ですか。

高橋 その当時の生徒は話を聞くのが好きでね。そして自習の時間に代りの先生がおいでになるでしょう。先生に話をさしてやろう

と言つて話の時間にさしてました。

栗田 話をせんと、話の種を仕込んでか

んことには、補習の授業に行つたとき困りよ

るんです。(笑声)

### 栗田式教授法—厳しくそして

#### 優しく

高橋 それで空地先生は栗田先生の講義を

お聞きになりましたか。

空地 ええ聞きました。三年、四年の時に

歴史をね。

高橋 私はね、先生の授業は外国地理を教

わりました。

空地 私は先生のナポレオンの話を、家へ帰ってからいちいち細かい字でずっと書きよったのを覚えています。歴史はいつもよい点を貰いよったですね。(笑声)

高橋 先生が一番始め、地理の時に入って来て一体地球の周りなんぼあると仰云って——これが先生の第一問やったですよ。みんなあてづっぽうな事を言ってる、違う違うと仰云って正式な解答をされた。それとも一つ、試験の後で解答した後で、外国地理ですから、ボスフォラス海峡というのが書いてあるんですな『違う、ボスボラス海峡だ』とおっしゃって訂正されたのを覚えています。

栗田 試験の事ですと、三十六回のクラス会やったか、神戸市のね、交通局長をしていた丹羽君が後で八先生に答案を貰って『きれいな字で書いてある、精神的な方面にも影響するから字はきれいに書いてあるのがよい』と書いてあったのが忘れられません。それからずつと字はきれいに書いていますVという事を言っていました。ちょっとした先生の添え書きというものが、生徒の一生に影響力を持つものだと思うて感心しました。

高橋 水田先生はどういう事を。

水田 私は東洋史をね。今でもよく記憶に

残っているんですがね。栗田先生の東洋史と言うと、堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子それから都が何処で、どの時に滅んだとかいうこと、それを生徒が気を散らさずに聴くものだから、赤壁の戦なんか先生も後予定があるのに、お話がうまいから『その次も話して下さい』と言うて……(笑声) せがむんですわ。

水田 東洋史なんか云うと、まあ後漢とか前漢とか出て来ると、ごちゃごちゃするのですけれどね、やはりあの時いつも試験に出して、都がどこにあるか、何年間あったか、誰の時にどんなことがあって、誰の時に滅んだか、いうて頭にみな残るんです。それでクラス会やなにかしますと『東洋史』やいうと堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子……(笑声)

栗田 東洋史はもう皆なそうやったです。

水田 一題はねえ先生、満点貰えるようになるんやから……(笑声) みな覚えんといかんで自然頭に残るようになるんです。

栗田 東洋史は時代が難しい、時代がはっきりせんといかんからそれで一番始めに太古・夏・殷・周・秦・西漢・東漢・魏・呉・蜀・晋・南朝・北朝・隋・唐・五代・宋・

元・明・清と現代に至るまでの時代をずっとみな暗誦さしたんですね。必ず東洋史の時間のはじめには、二三人暗誦させて、試験の問題には必ず一題はそれを出して……(笑声) それで二十五点なり三十点取れるでしょう。落第点は私の試験にはつかんのです。

高橋 先生の愛情ですね。

水田 結局あれでね、時代の観念というものはわかるんですね。それでないとね、日本史なんか教えてもらった時のんじやいうと、さあ一鎌倉時代か奈良朝か、どちらかどうだかひっくりかえて……(笑声) 栗田式に教えて頂いておればいいんですけれどね。

高橋 また、そういう風にせんと覚えられしませんわ。

栗田 さきに空地君がナポレオンの話をしたが、僕がナポレオンが好きで、時間外にくだしい話をしよったから、まあ後で府川哲男君(二十五回卒業)がニューヨークの方に駐在して居る間にナポレオン伝記の原書を十冊わざわざ送って来てくれた。そのナポレオン伝記は早速ここへ寄附して今でもこの図書館にある筈です。

空地 私が三年生の時に肋膜炎をやって、とうとう一学期休んでしまつて、たださえ成

績がよくないのに勉強せなんだものだから、一年原級に留まらなければならなかった。学校へ行くの嫌だなーと思っていました。母が非常に偉い人、おね、叱りましてね。

『姫中へいかにかん。よその学校へ変るのは絶対にいかん』とひどく言われてね、また姫中に出て来る気になって、その時に教えて頂いたのが栗田先生でした。学校にいらっしやるということは前から知っていました。私が教えて頂いたのはその二回目の三年生の時でした。それから今淡路に居られる樋賀安平先生（その時大宿安平先生）と二人、忘れられません。私にはその時に懐しい感じがしてほんとになんだか嬉しく勉強する気になって、私はその年、優等生にしてみました。ハハハ……（笑声）

栗田 一年遅れた甲斐があったということですか。かえてその方がよかったです。

空地 その歴史だけはすっかり暗記してました。試験の時はそのまま書きよったと思えますがね。

高橋 先生のお宅は二階町にありましたね。

栗田 はあ、はあ。  
高橋 それから後に光源寺前にありました

ね。両方にあったわけですね。

栗田 二階町の方は店で光源寺前の方は本宅になっておった。私が店の方におって、後に光源寺前の方で兄がなくなったので、光源寺前の方へかわったのです。

空地 その頃賀陽宮さんが行かれたのですね。

高橋 ええそうです。宮さんの邸になったというんだから。

### 教え子はみな人間として偉い

栗田 この空地君の同級に偉い人が出ていますよ。北野正次、軍医中將でね、今度の戦争第二次大戦に満州の方へ行っておってなかなか偉くて。

空地 あれはね、私の大学の同期の石井中將と北野君と天皇陛下の三人がソ連の戦犯に指定された。

栗田 それで引き渡せと言ってきたのを、マッカーサーが蹴ってしまっただけじゃなかった。北野正次君はずいぶん病原菌を発見していますよ。アメリカ軍が朝鮮に駐在している間にね、アメリカ兵が非常にたくさん病原不明の病気に罹った。それを北野君が調べて、そういう病原菌だということを見しました。

また後にアメリカの軍医団がやってきて、北野君に会って病原菌の話聞いて帰った。それから戦争中に大陸の徐州でわが軍が大分原因不明の不痢症になった。それも何が原因かわからなかった。北野君が調べて栄養失調やということになったが、そんなこと言われへんです。そんなこというたら経理部の失態です。それで原因不明のままにしてとにかく対策療法を教えてよくしてやった。それから満州の方の風土病の原因にも関係しています。

けれどもその当時は戦犯者なもんだからしてそういう北野正次君の功績は土に埋もれたままになってしまっているんです。

尾田 まだ御健在なんですか。

栗田 ええ健在です。

水田 東京の方でブラッドバンクの何かやっていたね。会いましたよ。

空地 白城会の総会に去年きていました。

栗田 東京の三十八回のクラス会に招かれて私が行くこと必ず何です、北野君が自動車で迎えに来て『家へ泊ってくれ』と行って迎えに来られる。断わりきれず東京へ行った時は大い一日北野君の家に厄介になる。そんな偉い人でもやっぱり先生を大事にされるのを有難いと思っています。それから同期生



で吉島政義君が、これはいま海員組合の会長  
になっている。

水田 三十年の時には見えてね。『会  
長をしている』と言って……。

栗田 これもなんですよ、会長やから日本  
でただ一人の人になっちゃった。これもやっ  
ぱりなんです、吉島君の所へ行くと必ず宿  
屋まで訪ねてくれる、そして『是非家まで来  
てくれ』と言うて案内される。そりゃもう本  
当に涙がこぼれる。そう言う和三菱化成の社  
長とおった桑田時一郎君ね、さっき寄附金  
の話があったけれど、あの時行ったついでに  
頼まれて私あの家へ行って寄附金のこと頼ん  
だら『一体なんぼ程したらええんや』と言う  
話で『まあ、十万円程お願い出来たらと思っ  
てます』と言うたら『あおそれでよろしい  
か』と言うてすぐ十万円出された。その桑田  
君なんにもそんなに金持ちやあらへん。清廉  
潔白な一介のサラリーマンに過ぎないんやけ  
れど、もちろん社長はしておられたけれど。

尾田 この秋の東京の白城会でお会いしま  
して、先生方の消息を知らしてくれというこ  
とで、栗田先生や瀬戸先生やらその外の先生  
方の消息を調べられるだけ調べてお送りしま  
してお礼状が来ていました。

栗田 東京へ行った時なんですよ、わざわざ  
さ帝国ホテルへ呼んでくれて、それから『私  
暇やから一日お供します』言うてずっと車で  
『新宿御苑の桜がまだ残っているやろ』とか  
言うて新宿御苑の桜を鑑て『まだ時間が早い  
から』云うて、上野の展覧会を見に行きまし  
た。それからその展覧会を見に行く途中で、  
神田明神の前で止って『ここにおいしい甘酒  
があるんですよ。先生知ってですか』言  
うて甘酒屋へ入って、甘酒をわざわざごうい  
うもの(手でかっ好される)につめて、『こ  
れを宿へ持って帰って下さい』言うて、それ  
から夕方に銀座に帰って来て、銀座で天婦羅  
の御馳走になったんですが、その時に、石田  
君(新三菱重工KK取締役三十一回卒)、そ  
れから同期生の藤本君(藤本章雄、東洋製作  
所会長、二十三回卒)、そんな人達を電話で  
言うたと見えて来ておって、御馳走よばれて  
帰ったことがある。そういう偉い人になられ  
たああいう忙しい体に一日中案内してもらえ  
て、気の毒やと思ひ、先生の有難味やなあと思  
うんですよ。こういう点ではあの三十八回の  
山本脩太郎君ね(東京大学農学部教授)あの  
人も忙しいのに車で朝から宿へやって来て

『先生今日はどうか、案内します』言う

て、朝から自動車ですうーと東京中案内して  
くれて、そして、晩に宿まで送ってくれる、  
ほんとに出来ることやないと思うて有難いこ  
とやと思ひています。帰ってから私こういう  
話を家族や親戚の者にしますと『ようできた  
なあ。さすが名門姫中だけある』言うて、  
『そんなことはよその学校でする卒業生おら  
へん。出来んこっちゃ』言うていました。そ  
う云うと結城令聞君(元東大日哲教授、三十  
二回卒)が剣道の大将で京都へ遠征して優勝  
旗を持って帰ってきましてね。その前後の剣  
士の中には日綿の福井君(慶三、二十九回卒)

それから東洋レーヨンの桂君(弘、東洋レー  
ヨン総務部長、三十九回卒)、山本脩太郎君  
そういう壮々たる名士が当時姫中で剣士だっ  
た。(※これは先生の御記憶違いで優勝時の  
メンバーは釜谷正俊(三十四回卒) 蔭山虎二  
東洋ゴム(三十二回卒) 宮田次男、医学博士  
(三十二回卒) 深沢景樹、高嶺神社宮司(三  
十二回卒) 結城令聞、文学博士(三十二回卒)  
である。校友会誌第二十九号による)

高橋 お医者さんなど剣道をやっている人  
は総体に長生きしていますね。

水田 長野先生(充孝、大正十四・昭十六  
剣道教師)もよく鍛えておられるからお元氣

ですね。四十年来同じ顔ですよ。私の門先をよく通られますがね。長い髯を生やしてですな。

空地 まだ生きとってですか。

一同 生きとってや、生きとってや。(笑声)

水田 自転車に乗って姿勢がいいですね。

高橋 私の家へも寄るとおっしゃってるんでね。一ぺんその長野先生の武道の話を録音にとらないかんですな。

尾田 佐々木さん(米行、白城会理事、三十二回卒)、結城さんと同期ですけれど、栗田先生は主任長だったんですね。

佐々木 ええそうです。

## 一筋の伝統精神—質実と負け

### ん気

高橋 随分年々によって学校の気風も変わりますからね。一番ひどく変わったのは、私が丁度四年生ぐらゐの時だったか、泥谷良次郎校長だったか、あの人はクリスチャンでしょう。今までの気風をすっかり変えてしまつてね、いわゆる武士道的な義士会をあの人が否定したんですわ。それが非常に世論に反感を

起して『義士会をしない学校があるもんか』というようなことで、私の父のしとつた「驚城新聞」でじゃんじゃん書きよつたことがある。それでも態度を変えなかつたものですね。とにかく義士会は一応しましたけれども、非常に読書の好きな方で本をたくさん持っておられた。卒業してからも私は見せてもらいましたがね。

栗田 あの人は植木が好きでした。学校におる時分は金山へ植木を探しに行っている時間が多いといわれるぐらゐに植木の好きな人でね。

高橋 その後に野球校長といわれるぐらゐの野球の好きな野村浩一校長が来て、ころっと野球学校にしましたね。

尾田 生徒の気風はずっと先生が昔から眺めて来られてやはり変つたと思われませんか。

栗田 いや、私の見るところではやはり一貫した伝統精神が流れていますな。やはり昔ながらの質実なところがね。負けん気の強いところがね。

高橋 今も残っていると思いますが、この姫中の、今は西高ですが、皆学問好きですね、そういう点はこれからもっと……。

空地 私も栗田先生からひきついで、はや

十四年間理事長として毎年卒業式の祝辞をやって今年で十四回目になるのですが、ステージに上つて生徒を見ますと常に行儀が良いのです。私がそう思っているだけでなく、他の学校の卒業生のおえら方がたくさん来ておられますが、みんなそう言っている。私が面白い事を言うてわあっと笑わせると、笑いますよ大きな声で。次の瞬間シャーと元へ戻っている。あれが他の学校では見られないと、他の先生方がよく言うてですね。

高橋 外来者が一番よく見ていますからね。かえつていつも慣れていると気がつかないがね。外来者が来た時、この学校の気風は何かとはつきり出て来ますからね。

空地 昔のことを受け継いでいますよ。中学校と高等学校のちがいはありますけどね。

栗田 勉強熱心にやるという点でね。

高橋 その点は非常に熱心ですね。この学校はそりゃ伝統的ですよ。

栗田 自尊心とか自負心を持っています。

高橋 清瀬さんも言うていました。姫中の伝統は頭は良いけど運動が鈍くて野球をしたら負けるんだ云うて。清瀬さんも選手をしたことある言うてね。

尾田 先生も野球部長をしておられたこと

があるんじゃないですか。

栗田 長かったです。

## 盛んであった体育活動

尾田 何か野球部の話を。今の野球部はあまり強くないんですけれど……。

栗田 まあ一番強かったのは水室君（現野球評論家芥田武夫氏、三十三回卒）の時代で神港商業、これが県下で一番強かったのですがこれとやって極く僅かで負けたことがあるのですが。（注・大正九年7—9夏の東遊園地の大会3回戦）水室君の次の福沢君（英男、三十五回卒）、あの時には甲陽中学と宝塚でやってその時3対2か……。 （注・大正十二年夏の大会県予選優勝戦宝塚球場甲陽P岡田姫中P北条）

水田 4対3じゃったですね。3点リードしておったのにそれ永井（茂雄、三十六回卒 現佐賀県教育委員会）が怪我をして、信沢（義次、三十八回卒）がサードに入って——。

栗田 そいで姫路の方では提灯行列の用意をしていると言うとる時にサードの永井君が歯を欠いてその代りに2年生の信沢君が補欠に入って、そこで三塁を強襲されて逆転されてしまつて4対3で負けてしまった。その年

に甲陽中学が全国で優勝してしまつて、ああ思い出しても残念で……。

水田 丹羽（勇、元神戸市清掃局長、三十六回卒）もおつたでしょう。

栗田 それから福沢がショートで少年野球が優勝して優勝旗を持って来たことがある。

尾田 水田先生がいつも応援団長やー。（笑声）

高橋 泳ぎを知らずに中学に入って一年生の時に教えてもらつてね。あれが非常に面白うてね。

栗田 それをいうとね、このわれわれの思ひ出としては飾磨に未だ鉄道の出来ん時や、飾磨まで五十丁の道を姫路から皆歩いて水泳練習に行つたね。それで大てい、一年間といつても二週間やけど、やっている間に大てい初心の者でも五十丁の試験に泳げるようにならざるを得ない。

高橋 これは特筆大書してもよいと思うんですが、卒業生でみな上級学校へ進学している人が夏休みに帰ってくるでしょう。それが先生の助手ですよ。先生は全体の監督みたいにしてその卒業生が一年生や二年生の子に水泳を覚えてくれたんだ。そして私ら砂の上に座らされて蛙泳ぎというの教えられて、今度は

浅い所で足のけいこをして、だんだんうまくなつて自然的に泳ぐように皆もつていかれたんですわ。

栗田 そりゃまあ五十丁の飾磨街道を暑いところを歩いて往復して水泳に行つたね。あの時分の学生としては懐しい思い出やね。一番はじめに要領試験があつて、それに通つたら一丁があつて、それから二丁、五丁、十丁ね、それから二十五丁、五十丁、しまいに三里半、五里が最後でしてね。

空地 その時分にそら豆の煎つたやつを襦につけ、二銭のアンパン、それが嬉しかった。

高橋 私もね、時々飾磨まで歩いて行ったことがありますわ。

水田 あの時分、通学の時自転車もありませんわ。

高橋 自転車は市内はまかりならんやつたね。

水田 自転車は二里以上やないといけないうて。やはり歩いたものが健康で残つてるねエ。斉木（亀次郎、二十七回卒、山陽色素社長）やなんか三里広畑から来るのにバス会社の下の所までわらじをはいて、それから靴にかえて来たもんやがね——。

西岡 水田先生も飾磨から歩いて来られたんですか。

水田 私も飾磨から歩きました。ずうーとね。

西岡 今でしたら飾磨から電車に乗って、それからバスでそこまで来るんですからね。

(雑談しきり……)

## 自治と愛情の修学旅行

栗田 僕らの生徒時代の修学旅行というのがほんとに自治的なもので。大体行く前に行く道筋とそれからどういふことを見学するかという事を教えられて、それから組分けをして好きな者同志組み合わせて、班に分けてしまつて、そいで出発する。行く時に先発隊、後発隊いふのを決めて先発隊は宿へ着く一時間位前になると隊から離れて先に行つて、先生も誰も着かんと先発隊一班七、八人の者が行つて宿屋へ先に着いて部屋割をすっかりしてしまつて、先生に代つて宿と交渉して、先生には特別上等の部屋をこしらえてある。それから先発隊が部屋に応じて案内して行く。それから翌日は後発隊というものが残つて部屋の掃除をすっかりしてしまつて、部屋を清めてから後、おくれて行つて途中で追いつ

て来る。

高橋 それは先生の在校中ですか。

栗田 ええ。

石坂 皆歩いて行きよつたんですか、修学旅行には。

栗田 いや汽車の利用できるところは利用しましたが。

高橋 宿屋に泊るほどですか。

尾田 それは伊勢旅行のことでしょう。

栗田 いや違うんです。一年生の赤穂行きはきまつているんです。二年生は天の橋立の方、三年生で伊勢から京都の方へね。四年生五年生になると高野山、和歌の浦の方を回つて吉野山に登つて帰つてくる。四国の方へ琴平参りをするものもあるなど大体毎年決つていました。それで宿屋もまた姫中の生徒の帰つた後は掃除する必要がない。皆喜んで後から感謝の手紙などしょつ中きていた。

西岡 その気風は今でも残つていましつてね。修学旅行した後、九州の評判もいふようですね。

栗田 そうですか。ところが、近頃新聞をみると万引きしたとか、暴力沙汰があったとか、新聞など見ても変わり果てたもんやなあと思つて情なくなつてしまふ。

高橋 私は卒業旅行で五年生の時に大和から伊勢の方へ行きましてね。それから吉野山へ行つたのですがそれは姫中の歴史に残る雨中行軍やつたんですよ。本沢(清三郎)先生が談山神社へ行つて、また畝傍へもどつて汽車に乗つてまた吉野へ行くのは遠廻りだから談山神社からずつと谷へ下りたら吉野の川のところへ出るから日暮までには行ける、そういうそらばんもつたんですね。ところが雨が降つてね、奈良でとまつていたらざんざん雨で、法隆寺廻つて畝傍へ行つた。その時分まだハイカラなコートもなし、合羽を買つてね、武蔵坊弁慶みたいな装束をしていたんですよ。そして法隆寺へ行つても雨、畝傍でも雨が止まず要領のいい連中は『足が弱りました』と言つて汽車に乗つて行つてしましました。(笑声)後に残つた連中がね、談山神社へ上つて、上つた時分に既に日も暮れ、そしてずつと谷へ下りたら真暗で何もわからなかつた。ざんざんでようあれで事故を起さなかつたと思う。一人でも事故を起していたら大問題やつたんですね。先生同志で後で言い合ひになつたんですよ。それは本沢先生の発案で、しかもその時の主任の高取(卓蔵)先生が『わしは一番後から行く』と言つて、靴は

破れてしまふ、跳になってしまつて、あの先生目が悪くてベアいうてね。

水田 そやそや、ベアいうてね。

高橋 その高取先生が行方不明になつたというて大騒ぎして、やつとわかつて安心しました。そして皆安心して食事したのは八時頃でした。そりやもう殆ど泣かんばかりに感激しました。そういう時分でしたがそれまでに四国の方にも二年生で行つたこともあるわけですな。

栗田 私が三年生の時に京都を朝五時頃に出て比叡山の上つて下りて琵琶湖畔に出て石山寺通つて宇治まで一日十五里(ほう……笑聲)石山寺を出てからコワタ峠という峠を越えた時に小野いう漢文の先生が弱つてしまつて『ここで死んでしまふ』言つて、そこでへたばつてもうて動かへん。それから一緒におつた生徒が『先生しつかりなさい』言つて先生の荷物をすつかり取つて先生の両脇に一人ずつ入つて先生を引きずつてコワタ峠を降りたことがあります。そしたら下の先発隊の連中も小野先生だけまだ来られんいうて提灯持つて五、六人下まで迎えに来ておつたです。そういうような先生と生徒の間の情愛というものは親しいものであつてそりやもう親

しいものがあつたなあ。

高橋 実に親の如くで、特に高取先生などは人情の厚い先生でした。あの水田先生、私の一年上ですが同じようなコースでしょう。

水田 そうです。

高橋 そして空地先生はどこへおいでになりました、卒業旅行というのは。

空地 私は奈良から伊勢、京都です。

高橋 大体同じコースですね。

水田 京都は私なんかは大正五年やから、殊に京都で御大典もあつたもんだから談山神社から京都の方の御所もね、見学しましたですがね。

高橋 京都で落ち合つた年もありますよ。上級生とね。どこかの卒業旅行と一諸にね。

尾田 その時分の卒業旅行のコースは？

栗田 同じコースです。四泊五日位やつた。

高橋 私は日記を書いているんです。それを読んでいただいたら同じコースの人やつたら思い当られると思うんです。殊に高取先生遭難記がね。(笑聲)実際そうなんです。よう助かつて怪我也せずにあの目の悪い先生がよう無事に帰られたことですね。そして責任ということですね、一番後でおいでになつた

ということは。私らの卒業生は極く僅かで八十八名でした。その当時旅行に参加したのは七十名ですけどね。その内要領のいい連中は汽車で行つて、今になって言いますけれど皆煙草を覚えた頃ですよ。(笑聲)汽車の中で煙草の先輩がおつて、煙草はこうして吸うもんじゃちうふうなことで、喫煙の講義列車になつたらしい。こつちら正直にね、だあーと歩いて行つたんですがね。

栗田 空地君と同じ組とお伊勢参りをした時に遠藤(佐久治)先生なんか僕らと一緒にやつたですが、原浅夫(二十四回卒)いう級長した人ね、あの原君が『先生ここで待つて下さい。バスが来ますからそれにみんな乗つて駅まで行つて下さい。私等歩いて行きませう。私ら別条ありませんから』言つてね。それでちゃんと我々がバスに乗るのを見届けてから手を振つて原君なんか歩いて行つたりしよつた。その原君なんか先生が弱つておつて思つてバスの停まる場所を調べて、ずつとそこまで連れて行つたわけや。その原君なんか汽車にのつたらずつと車掌さんのように各車をまわつて……(笑聲)

高橋 そやからあの人鉄道へ入りましたが(笑聲)あの人卒業してから鉄道へ行つたん

ですよ(笑声)

栗田 各車をまわって生徒の世話をしました。

水田 ようしよったね。

高橋 あの人も恩があるんですわ。

水田 神屋の方から牛乳なんか配達して苦労しとった、あの人は。印象に残ってる。

空地 苦労して鉄道へ入ったんですわ。

高橋 あれと二階町の堀君(常蔵、二十四回卒)ね、あの人も角っこの宿屋やったんですわ。そして鉄道へ行ってね。その時分の中学卒業生で鉄道へ入ったらね、そら偉いもんやったらしかったね。『入った第一日に給仕がお茶をもって来よって、びっくりした』と

言うて堀君がよ、言いよりました。(笑声)  
空地 剣下げて来よったなあ。  
高橋 判任官の待遇でしたね。

栗田 原君なんか級長として、クラスの世

話から先生の世話までしよった。(笑声)  
高橋 私はよう知っていて原君の写真を持

ってますが、よう世話をしてね、親切でね。

昔はよかった?

### のびのびした雰囲気

尾田 遠藤先生は歩く方はあまり強くなか

ったでしようね。

高橋 あの人はライオンいうあだ名があつてライオンそっくりやったね。動物園みたいな名をつけよった。その頃の中学生いうたら。熊があるし、馬がおるし……。

水田 遠藤先生はテニスをやられんかった。高取先生も。栗田先生は上手で、先生はフォアの方へやる方がいいんで、バックに行かれるときつい球で打ち返されて、うまいこと前衛を抜いて笑うて澄しとってんや。ようやりましたな。

高橋 先生はスポーツマンやったんやね。いやもう栗田先生は文芸人ではあるし、地理や歴史も達者であるし、一人で何役も……。

尾田 ことにあの校長さん、横田先生の頃一番テニスが盛んだつたですわ。

水田 あの時に、あの先生はすることがないから『昼からすぐにテニスをしよう』言うて誘いに来てんやものなあ。

栗田 校長室のドアが開いたら、ずっーと残っている職員見渡してラケット上げて合図して……(笑声)

水田 こちらの方にしたら上級の方でプリントを書かんなんのにラケットを持ってちゃんとかとってんや。

尾田 いや、あそのまん中のコートでね。よくやっておられたんや。

水田 講堂のあの校舎の間でね。

尾田 二年一組の教室からよく見えたね。

栗田 あすこの隅に井戸があつてね、その側へ柴垣君(武夫、三十四回卒、加古川東高校長)が一年生時分よくチョコンと入って先生がテニスをしている時、後へ来てテニスをしたそうに歩いてみておつた。しまいに柴垣君ととうとう庭球の選手になつてしまつた。

高橋 やはり見て覚えたんだね。

水田 そら器用で上手であつた。

高橋 私ら中学に入った時、上級生に敬礼せにゃいかんいうて、もう上級生片端から礼をしとりました。一年の時分は背の大きい人やつたら皆礼をせにゃあかん。礼をしよつたら同じ一年生で、背の高い人やつたら分らしませんから上級生やら同級生やら。後でしまつたいうような事を言つてね。(笑声)

空地 私らは三年生からお辞儀をしまつた。

高橋 ああそうですか。3という字をうまく糸でくると5に見える。

一同 そうそう……(笑声)

高橋 そういうことをしている人があつて

ね、1・2・3と学年がわかりますからね、五年生でも柄の小さい人もありますからね。

## 張り切った伊伝居新校舎への 移転

栗田 あの新校舎へ移転したのは明治四十二年やったが、あの前の木ね、全部生徒の手で植えた。卒業生が寄附した木もあったんだけど、在校生が穴を掘ってそれからいよいよ引越しの日には全部全校生が車にいろんなものを載せてね、蛭々として道を馬車道の方から北上してこっちへ移って来た時はなかなか盛んやった。まるで輸送隊の大隊か、輜重隊が行進しているようで……。

高橋 丁度出来上ってきれいになった時分に私らが入らしてもうたんやけど。

空地 土曜日になったら合併体操があるのでしよう。

水田 そうそう。

西岡 新校舎を建てるのに寄附金とかいうのがありましたか。

栗田 全然具費です。

高橋 あの長さが六十間あった。京都の十三間堂に負けん長い校舎が出来たいうんでね、三十三間堂はその倍で六十六間あるんで

すが、大体三十三間堂いうたらこんなもんでと覚えた。ところがあの建物がちょっと貧弱でね。お隣の師範学校はがっちりしててね、最後まで残ったでしょう。まあ後から出来てもそれも日露戦争の後でね。

栗田 戦争の關係でしよう。

高橋 そりゃもう師範学校いうと、姫路でその当時の最高学府で、建築的に非常にかっちりした建物で、あれなんか今でも使える程やったんですね。やっぱりこのことも時代相示すというんですか、まあね私も一度思い出して書きます。大分先生から色々話を教えてもらったんで、私個人としても大へん有難うございました。「姫路文教の五十年」というようなものも考えていますから必ずそれに載せます。

栗田 姫路京口の姫路中学の校舎のね、写真があったら、あれは珍しい。裁判所が同型でね。

高橋 そうそうよう似てましてね。それね写真をちょっと見てみたら中学かいな、裁判所かいな位よく似ている。同じ設計者かね。その当時の流行でそんな形式でそれがお寺に見えてお婆さん連中がかどを通りながら拜んだいう話があるんですわ。実際そう見え

ますわ。私も旧校舎を覚えてますよ。小学時代ですけどね。私の学校がこっちへ変わった後で品評会か共進会があったんでおぼろげ乍ら校舎の写真がありますからまた載せませう。

## 後に続く者よ 伝統を生かし

### 大いに努力されよ!

尾田 われわれが今までめったに聞いたこととかなかった珍しい話をいろいろ拜聴させていただき有難うございました。

高橋 何と言うても私らより10年以上も古いお方やから。

尾田 先生、それから在校生に対する希望でもございましたら一言おっしゃって下さい。

栗田 やはり姫中を承継いでいることを在校生諸君も自負しているらしいですが、伝統精神というものをどこまでも尊重せられて、たくさんの先輩の後について行くように或いは先輩を凌ぐぐらいにしっかり努力されるように願っていますね。

尾田 どうもありがとうございます。最後に自己紹介をお願いします。

栗田 第十三回生の栗田肅夫です。

空地 第二十四回卒業生空地純一、今白城会の理事長を栗田先生から譲り受けて十四年間引き続いてやっています。

佐々木 私は三十二回の佐々木米行でございます。恩師栗田先生の懐旧談を非常に興味深く承りました。

長谷川 私は四十回卒業の長谷川隆吉でございます。現在学校の中で生徒指導部の仕事をさせていただいています。只今栗田先生から色々過去の路中の生徒の様子を聞き、その伝統の精神がやはり西高にも伝わっていると思うのでこれを充分現在に生かしていくのが望ましいという言葉をいただいで、今後この生徒指導の仕事を通してできるだけ先生の御期待にそうように努力して行きたいと思っております。

高橋 私は大正六年に卒業しました第二十六回の高橋秀吉であります。かつて在学中に栗田先生に外国地理を教えてくださいました。その印象は未だにこの頭に残っています。先生の御恩を非常に感謝しております。今日はどうも有難うございました。

西岡 私は昭和十四年にもとの姫路中学を卒業しました五十回卒業生の西岡平八であります。現在母校で教鞭を取らせていただいで

います。で栗田先生のお話を伺いながら、教師の職業というものが如何に大切であり、また生き甲斐のある仕事であるか、つくづく教えていただきましたこと深く感銘に存じています。

尾田 私は三十六回の尾田龍です。今、白城会の校内理事をしておりますが、私が姫中におりました時栗田先生ちよど主任長であられました、その頃姫中の校友会のお話を先生からたびたび伺ったことを覚えております。私も今同じ立場で生徒に話し乍ら、あの頃栗田先生からこんなお話があったと思ひ出し乍ら生徒に話をしてる次第です。

水田 私は二十七回卒業の水田弥太郎です。五十幾年前に栗田先生から東洋史を習いまして昔の生徒の時分に若返った気持ちがあります。栗田先生がいつまでも御健康で天寿を全うせられるように心からお祈りしている次第です。

石坂 私は四十八回の石坂豊明でございます。今日は朝から幹事会を開きましてそれを機会に栗田先生をお聞きしました。昨晩雪の方から懐かしい話を聞きました。昨晩雪が降りまして、今日はどんな天気になるかと思いましたが非常に暖かな日で有難く思っています。

ます。今日は昭和三十九年の二月の十六日、今時刻は午後四時六分前です。終ります。

(この座談会の録音テープは本部姫路西高校にあります。お使いになりたい方は尾田理事まで御一報下さい。なお筆録に当っては、かなり時間をかけ正確を期したのですが、なお聞きとりにくい所もあったりして誤りがあるかも知れません。お許しを賜われるとともに、御教示下されば幸いです。 編集子)

### 【二十七ページのつづき】

す。「通信」の「支部だより」の欄も追々充実させ、会員相互の連絡を密にしてゆきたく思っています。

### 白鷺城総改築

が成り、天下の名城たる偉容を空に泛べています。「仰げ儼たる白鷺城 白き翼にしずもれる 山河の愛を脈博を 朝に夕に照り映えて 秀麗比なし五層閣」と日夜口ずさんだあの姫中校歌のことは通り、空に泛かべる巨艦の姿を昔日のままに見せていくれます。遠く姫路を離れていらっしゃる皆様、是非御一見下さい。来姫のほどお待ちしています。なお、その節は母校にぜひお立寄り願ひ、先輩諸兄の築かれた輝かしい伝統を受けついで、新しい生長を遂げつつある後輩に叱咤激励の御言葉をお願いできれば、まことに幸いです。



## 支部だより

この「支部だより」の欄を設けるに当り、現在本部で確認している各支部の代表者に①支部所在地(連絡先)②支部代表者の氏名、職業、卒業回数③会員数④支部の定例行事、集会⑤御紹介のことは⑥本部への御希望、という六項目につき御返事願いましたところ、目下次の各支部から御返事を頂戴しました。ここに、御紹介申し上げます。

〔東京支部〕①東京都

足立良平方 白城会東京支部 ②未定 ③約八五〇名 ④年一回以上の大会開催。幹事有志会は必要に応じ随時開催。各卒業回期毎の集会も随時開催。⑤政治、文化、経済の中心にある東京支部として幾らかでも校友会と会員の皆様のお役に立てばと思っております。⑥姫路市東京事務所の拡充と母校白城会本部並びに東京支部との連繋の強化具体策をお願い致します。

(執筆者 三六回 足立良平氏)

〔県庁白城会〕(県庁姫中会)①神戸市生田区下山手通五丁目兵庫県庁内人事課 鷺沢衛

也氏 ②会長—吉田豊信(四〇回 出納長)

顧問—元原利一(二九回 県議)矢野善寛(特県議) 松野武雄(三五回 監査委員)③本庁三〇名、県出先機関等四〇名、計七〇名 ④

毎年秋に総会を開くことにしていますが、今後は会員の栄転、外遊等のつど気軽に合会を持つ予定 ⑤県庁姫中会は、同じ学窓に育ちそして職場に生きる我々が、常に「鷺山に秋の」を謳歌した昔日に返って互いに研鑽を重ね、また横のつながりを持つことよって幾分でも役所のセクシヨナリズムの打破に役立たせたいとの趣旨で誕生したものです。従って本会は、県本庁のみにとどまらず、県警、県教委の本部、更に県の出先機関の同窓も含め、最近では、西校卒業の女性もそのメンバーに加え、名実共に県庁白城会として元原、吉田両先輩を中心に活動を続けています。

(執筆者 五八回 鷺沢衛也氏 人事課勤務)

〔阪神姫中クラブ・白城会阪神支部〕①神戸市生田区京町 日本ビル南合名会社

②南健三(二五回 南合名会社社長)③別に決った会費の徴集はしていない。阪神地方並に姫路以東程度の卒業生を対象にして、別に区域の限定もしていない。④毎月第二木曜日正午神戸市生田区明石町日毛ビル内ニッケゲリル

にて定例午饗会。毎年六月頃年次総会開催(日時、場所等はその都度決定)⑤以上のよる程度の気楽な懇親会組織です。精々御出席御利用を願います。

なお、本支部は昭和三十九年六月一日、神戸銀行諏訪山寮における総会で、会名を「阪神姫中クラブ・白城会阪神支部」の二本立てによることに決定しました。

(執筆者 二五回 南健三氏)

〔姫路市役所白城会〕①姫路市本町六八 姫路市役所内 総務局長

②岡善一(三八回 姫路市総務局長)③一六三名 ④毎年春一回総会及び秋以後一回のリクリエーション(観光又は観劇など)⑤石見市長(二九回卒)を先頭に、市役所の白城会員は市の中核的存在として郷土姫路市政推進のため一致協力して取組んでいます。

(執筆者 三八回 岡善一氏)

〔奈良支部〕①②奈良市

長尾五一(三六回、医師)③約三十名 ④年二回例会の予定 ⑤奈良県には白城会員は少なく、名簿上には相当年配の方もおられるのですが、先日第一回の支部発会式を小生宅で行ったところ、私が最も古参でした。一期あとの中村信二氏(現在添上高等学

校長)を除くと、奈良女子大学生諸君が中心で約十名会合しました。大阪のベッドタウン化した奈良なので今後会員も増えると思います。女子学生の女子大入学者の増えることを希望してやみません。又、会員の方々が奈良の古きよさを楽しみたい方はどうぞ当方に御連絡下さい。

(執筆者 三六回 長尾五一氏)  
〔富士製鉄 西友会〕目下、残念ながら富士製鉄については、姫中卒、西校卒の白城会支部が設置されていません。西校卒業者のみにて「西友会」を組織しておりますので西友会名簿をお送りします。

(執筆者 西四回 岡田豊重氏 庶務課勤務)  
〔麿松会〕(げいしょう会) ①加古川市 松本佐一郎 ②会長、松本佐一郎(二六回会社社長) ③加古川市・高砂市・加古郡・印南郡の同窓約一五〇名 ④加古川市・高砂市が交代で毎年一回の集会を開くほか、平素においても会員相互の親睦を図っている ⑤麿松会の発祥は遠く明治にさかのぼり、第十三回卒業、奥源之助氏を久しく会長として加古川市・加古郡・印南郡の親睦をはかってきたが、昭和三十六年に松本佐一郎が会長となった。由緒ある鹿兎の松にちな

んで麿松会と呼んでいる ⑥本部ならびに他の支部と密接に提携しながら会の今後の発展を期したい。

(執筆者 三二回 竹内英夫氏 俱食生活改善事務局長)

〔京都支部〕①京都市 電、高橋勘氏 ②支部長、井上智

勇(三六回、京大文学部長) 副支部長、田中哲郎(四回五、京大教授) ③約二七〇名  
〔姫中会 東海支部〕 ①名古屋市中村区笹島町一丁目、名古屋鉄道株式会社内、竹田直  
②竹田直(三一回名古屋鉄道副社長) ③三八名(名簿あり) ④春秋二回の会合

以上のようにあります。御返事をいただけなかった支部、また最近新たに結成された支部などきつとあろうかと存じます。この次には必ず掲載させていただきたいので、代表者の方はどうか本部までお知らせ下さい。またこの欄は広く同窓の友誼を暖める場として活用したく思いますので、各支部での同好の団体、海外の活動や著作、刊行物等についてもニュースがございましたら、どしどし記事をご寄こして下さい。

## 本部告知板

### 本部役員

を御紹介します。昭和三十七年八月の総会で決定されたもので、任期四年です。( )内の数字は卒業回

1、顧問 母校校長 井内喜久次

(13)栗田 肅夫

2、理事長

(24)空地 純一

副理事長

(32)佐々木米行

3、理事

常務理事

(34)柴垣 武夫 (38)安平 康

校外理事

(32)川口 了二 (38)岡 善一

(40)大西 正一 (45)竹田 二朗

(48)南 洋 (53)蟹江俊一郎

西(1)高倉基康

校内理事

(36)尾田 龍 (40)長谷川隆吉

(48)石坂 豊明 (50)西岡 平八

(55)北沢 芳信 (58)橘 義康

西(4)末道久美子 西(9)鳩川晏弘

4、幹事

各回期の代表者(名簿に記載の通り)

## 白城会名簿

が出来あがっています。かなりの期間をかけ、正確を期したのですが、なお手落ちもあるかと思

います。御氣付きの点がございましたら、本部姫路西高校内石坂理事まで必ず御一報下さい。また、その後の住所、御身分等の変更がございましたら、その都度必ず本部までお知らせ下さるようお願いいたします。まだかなり残っていますから御買い求め下さい。一部三百円です。

## 白城会文庫

(先輩の著書と伝記) 母校図書館では白城会員ならび

に特別会員の著書及び伝記を蒐集して、これを白城会文庫と名づけ、別置して生徒の閲覧に供しております。現在冊数、著書一三四冊伝記二冊。御著書御出版になりました場合にはお手数ながら書名、著書名、発行所、定価を母校図書館までお知らせいただきたく(新刊でなくても現在入手可能なものお知らせ下さい)また御寄贈賜りますならばまことに幸いです。28.9頁に目録を掲載しています。

## 支部との連絡

を強化したく願っています。各支部の催し、

名簿、刊行物等ございましたら、必ず本部(姫路西高校内橋理事)までお届け願いま

す。〔二十四ページへつづく〕

## 合 掌

永山卯三郎先生

瀬戸直吉先生 御逝去

伊藤常吉氏

長年、姫中に奉職され、その深い学識と円満な御人格をもって、幾多の英才を御教導いただいた永山、瀬戸両先生並びに、姫中以来西高校に引き継いで「まかないの伊藤さん」で親しまれた伊藤氏が、お亡くなりになりました。ここに同窓生一同、御生前の御恩顧を深く謝すと共に、謹んで哀悼の意を表します。



永山先生略歴 明治八年、岡山県吉備郡園村に生まれ、同三十一年、岡山師範卒業。岡山の小学校、師範の教諭を経て、同三十七年九月、姫中教諭として赴任、同四十二年十月、岡山師範に転任されるまで本校にて地歴を講ぜらる。退職後も地歴の研究に余念なく、昭和三十八年十二月二十日永眠せらる。行年八十九。



瀬戸先生略歴 明治二年、長野県上伊那郡朝日村に生まれ、同二十八年、東京物理学校卒業。三十三年五月、姫

中教諭として赴任、昭和八年三月に辞任せられるまでの三十余年間、数学を講ぜらる。教化、人徳の大なるをもって頌徳状・感謝状などを受けられ、昭和二十二年後は大阪兵寺の御子息直一氏(二十八回卒・大和紡績社長)宅にて自適、三十九年二月十一日永眠せらる。行年九十五。御墓所は姫路市景福寺の裏山にある。



伊藤氏略歴 明治二十六年四月、姫路市下久長町に生まれ、同四十四年四月、伊伝居に校舍移築以来、姫中・西

高を通じ五十六年間の長きにわたって寄宿舎生をはじめ、全校生徒職員への賄いを担当せらる。至誠と情熱をもって業務を遂行せられ、再三表彰状、感謝状を受けらる。老骨にくじけず、業務に尽瘁のところ、昭和三十八年十二月二十日永眠せらる。行年七十。御墓所は姫路市五軒邸の法華寺にある。

農業問題入門

- 32回 遠地輝武(詩人・美術評論家)  
(木村重夫)  
遠地輝武詩集  
日本近代美術史
- 33回 鎌谷木三次(郷土史家)  
播磨上代寺院跡の研究  
射橋兵主神社と播磨国総社  
の研究
- 33回 原泰良(神戸電鉄社長)  
終  
百 舌
- 34回 井上完爾(元市立姫路高校長)  
才村の歴史
- 34回 東郷豊治(大阪外大教授)  
良 寛  
良寛全集 上・下  
良寛詩集
- 36回 桔梗利一  
文芸春秋35年史稿  
菊地寛
- 36回 井上智勇(文博京大教授)  
ヨーロッパ成立期の研究
- 36回 角田一郎(文博)  
人形劇の成立に関する研究
- 36回 品川三郎(相愛女子短大教授)  
児童発声
- 36回 石川準吉(法博 行政管理庁行政管  
理局長)  
日本鉱物資源に関する覚書  
生野鉱山と生野代官  
総合国策と教育改革案  
江戸時代代官制度の研究
- 36回 三木寿雄(明大教授)  
実際の教育  
全訂実際の教育
- 36回 松井岩男  
不死鳥

- 37回 団野信夫(朝日新聞出版局長)  
農業と政治  
農業、農村、農民
- 40回 椎名麟三(作家)(大坪昇)  
自由の彼方で  
永遠の序章  
赤い孤独者  
美しい女  
運 河  
椎名麟三作品集 1~7  
断崖の上で  
罌 と 毒  
長い谷間  
媒 婦 人
- 42回 小村雷教(姫路工大教授)  
西洋倫理想史
- 43回 黒岩一郎(文博 神戸大助教授)  
香川景樹の研究  
或る自由主義者の杞憂  
日本の心
- 44回 山脇正邦  
白色セメントの彫刻製作  
P 12~16
- 46回 山崎為人(本校教諭寒雷同人)  
句集 漂鳥
- 西3回 阿部良雄(中大講師東大大学院)  
若いヨーロッパ
- 西4回 平野博和  
石川啄木入門

伝 記

- 平井恭太郎著 水島鉄也(景福寺時代・元  
神戸高商校長)
- 片柳 忠男著 カップ大将(神吉晴夫伝・  
姫中30回)

# 白城会文庫目録

(昭39年7月調)

## 著 者 書 名

- 特 春山弟彦 播磨地誌略  
 景 三上参次 (文博元東大教授)  
 白河楽翁と徳川時代  
 4回 辻善之助 (文博元東大教授)  
 日本文化史 1~7  
 大日本年表  
 日本仏教史 1~10  
 日本仏教史の研究  
 5回 春山作樹 (文博元東大教授)  
 芸術教育論  
 教育学講義  
 14回 駒井卓 (理博京大名譽教授)  
 人類を主とした遺伝学  
 ショウショウバエの遺伝  
 と実験  
 生物進化学  
 人間の遺伝  
 17回 和辻哲郎 (文博元東大教授)  
 日本古代文化  
 偶像再興  
 原始仏教の実践哲学  
 埋もれた日本  
 日本倫理思想史 上・下  
 イタリヤ古寺巡礼  
 古寺巡礼  
 人間の学としての倫理学  
 風 土  
 鎖 国  
 桂離宮製作過程の方法  
 和辻哲郎集  
 和辻哲郎全集 1~20  
 25回 三宅晴輝  
 松永安左衛門  
 27回 齊木亀次郎 (山陽色素社長)(青紅)

- 台湾の旅  
 AHIRU  
 句集 春泥  
 あれから十年  
 27回 五十嵐播水 (医博 九年母主宰)  
 一夏の俳話  
 石路の花  
 九年母埠頭  
 28回 井沢 実  
 スペイン語入門  
 28回 高橋秀吉  
 姫路城の50年  
 姫路の交通50年  
 30回 中谷健次 (武蔵野美大教授)  
 図案指導大系  
 30回 神吉晴夫 (光文社社長)  
 現場に不満の火を燃やせ  
 30回 糟谷武美  
 日本毛織60年史  
 31回 笠置秀男  
 白色セメントの彫刻製作  
 P17~19  
 32回 後藤興善  
 マタギと山窩  
 32回 阿部知二 (作家)  
 阿部知二作品集 1~5  
 旅 人  
 青い森  
 冬の宿  
 日月の窓  
 貴 族  
 城  
 32回 河合悦三 (日農中央委員)  
 農業と農民はどうなるか  
 農村の生活  
 日本の農業と農民

# 白墨歳時記

第四六回生

## 山崎 為人

さくら

花影踏んで一教師たり日々同じ

昭和二十四年四月、西高教師として赴任した直後の作品である。昭和十年に姫中を卒業して十五年ぶりにみる校舎も校庭もひどく荒れていた。長い戦争が、直接戦火を浴びせなかったとはいえ、学園の建物、樹木にかなりの影響を与えていることはいまなかった。中庭の東隅にあった桜の木も随分年老いたことは、私達が学生だった頃には二階の窓と殆んど平行であった梢の頂きが屋根より遙かに高くなっていることにもうかがえたが、その苔蒸してごつごつとした樹幹に手を触れながら私はこの一本の桜樹の長い歴史を憶った。

姫中時代の中庭は生徒の応援歌の練習場であり、対外試合に出場する選手の壮行の場であり、放課後は先生方のテニスコートであったが、春にはこの桜が燎乱といっせいに花片を降らせた。花吹雪、全くこの形容がびたり

とあてはまる華かさだったのが戦後初めてみるこの木はどこかもの憂げで淋しそうであった。花も乏しくなり樹幹は瘦せて衰えていた。ここにも戦後がある、こんな言葉を吐きながら私は毎日その花影を踏んで出勤した。この木がいつ植えられたかは知らぬが、この桜は長い間幾多俊秀の夢を育んできた筈である。高らかな寮歌がきこえる。応援旗が風にはためいて、頬を赤く染めた選手の腫がきらきらと輝いている。湧きあがる畏き、こだまする拍手。また昼休みのひと時、木に背を凭せて未来の夢を語りあった若人もいたであろう。あの人達は皆一体どこへ消えてしまったのか。敗戦後一年間天津の銀行で足止めをくって翌年の夏に引揚げた私は、辛うじて命永らえたといえるが、優秀な同窓生の数多くが姿を消したことに對して暗然たる思いであった。そうした傷心の気持が、「一教師たり日々同じ」といういささか情ない表現をとって

あらわれたのかもしれない。この句の内容の消極性を好まぬ私は結局この句をどこにも発表しなかった。活字にするのは今度が初めてという作品であるが、当時の手帳にはこのような未発表の句が相当たまっている。

ところでこの桜、その後校舎改築のため旧教室は撤去されたが、木はそのまま残されて旧校舎あとにずらりと並んだ六面のテニスコートで若い男女の高校生が仲よく白球を打ち合っている姿を見下している。むかし東と南を校舎にふさがれて日当りの悪い場所で窮屈なおもいをしていた頃とはちがって、今は満身に明るい日ざしをいっばいに浴びながら伸々と大空へ枝を張っている。樹勢もこの数年再びとみに力強さを加えたようである。この一樹によせる私の気持が戦前派一学徒の失われた青春回顧の感傷であるとするならば、現在の若い高校生諸君にはまたそれぞれに各自の青春期の想い出がこの木に寄せられることであろう。昭和十六年に出版した私の最初の小句集「心影」には

友と名を刻せしさくらいまも咲く  
という一句が載っているが、これは全くのフイクションであって私はまことに善良なる一中学生であった。

# 西高生——その喜びと悲しみ

西高 第九回生 鳩川晏弘

わたしは西高九期生。入学は二十九年である。当時はまだ、新校舎の工事がまったく手もつけられていなかった。入学後はじめて入った教室の中央には、二階の床がぬけるのを防ぐ柱が立っていたし、校舎の両側には倒壊を防ぐつばりがあった。わたしは、自分が西高生であるというより、姫中生の末裔だという感じにひたつたものである。

そんなわたしたちも、三年生になって、やっと西高生になり切れる時がきた。三十一年校舎改築の第一期工事が完成したのだ。現在の南館の玄関より東の三階である。古い校舎から新しい校舎へ机を運びながら、わたしたちは、新しい校舎に入れるという単純な喜びと同時に、西高の新しい出発を感じたものである。わたしたちにとって、姫中は尊い存在であったが、また重い存在でもあった。しかし八十余年の伝統、それはちよつとやさそつと反撥していても、はね飛ばせるようなもので

はなかるう。よきにつけ悪しきにつけ、その伝統はこれからの西高に生き続けるだろう。反撥すること自体が、伝統の強さを物語っている。わたしたちが開かれた姫中のこと——それは、いかに小さな出来事であっても、それはすべて、男ばかりの中学校、において起きたことである。姫中の校風・行事・事件、それらはすべて、男ばかりの中学校、でのことである。今は西高、男女共学であり、有名大

学へ多くの生徒を送り込むことを最大の目的とした新制高校である。そうしてその二つに西高生の喜びも悲しみもあるのだ。さて、今年も五百名以上の一年生が入って来た。彼らの高校生活は、他の西高生、他校生への不安定な優越感＋劣等感で始まる。絶えまなく続けられる大小の試験、よければやれやれと思ひ、悪い時は、ガックリしたり、職員室へ呼ばれたり、それをくり返しながら西高生らしくなつてゆく。夏休みにもなれば

西高生だという実感もわき、ある者は大学へ入学までの意欲を燃やし、またある者はそれに不安と怖れを抱きはじめる。

補習のない夏休み、それは一年生のものである。休みに入ればすぐに神鍋へキャンプ、彼らは西高生としての団結心を燃やし、一生に於いても大きな影響を与え合う友を作るのもこんな時だ。

かくして一年生も一人前の西高生になつてゆく。ところが、彼らが、俺たちはまだ半人前の西高生だ、ということを感じ知らされることがある。それは秋の体育祭。他校では類を見ない、巨大で精巧なデコレーション。これには、日常ポケットに単語帳をしのびこませている西高生も、まるで人間が変わつたように熱中する。円盤投げの像あり、武蔵と小次郎あり、インデアン、バイキングあり、漫画の主人公あり、トラックをとりまく高さ一〇メートルに及ぶ立体的なデコレーションはは壮観というより外はない。男子も女子も一致協力し、経費の制限をかこち、雨に気をもみながらも、寝食ならぬ、明日の英単語のテストも忘れて打ち込む——それには西高生の知性とエネルギーが注ぎ込まれる。一年生は上級生の統一ある動きとその作品の出来映えに

驚異と羨望と敬意と、それに来年は、われわれもあんなにできるようはなるのだろうかという不安を覚え、自分たちのチャチな竹細工をつくづくみつめるのだ。

その間、球技大会、マラソン大会、遠足、弁論大会と行事は決して少なくない。しかし彼らに明日の小テストを忘れさせるほど盛り上ることは少ない。

三年間を通して、最も楽しかったこととして、正月三日間のスキーをあげる者が少くない。雪に縁の少ない姫路ッ子が一面の銀世界を見わたすだけでもしびれるような感動だという。大したスポーツもやらない彼らも、この日は一流スポーツマン然とした出で立ちで底抜けに無邪気だ。男子も女子もいろいろの回りで芸術を論じ、青春の夢を述べロマンチックな時をすごす。彼らは時の経過をいじらしいほど惜しむ。ただしこのスキーも、希望者だけが参加、二年生、三年生は冬休みが終ったらすぐに行われる試験のため参加は困難だ。

西高生が真に一人前の資格を備えるのは二年生になって模擬試験が受けられるようになってからだ、ともいえる。中間、期末考査の間に模試。その成績に順位がつき、廊下に張

り出される。彼らは自分の志望校と照し合わせ一喜一憂する。その上に、彼らは求めて、校外の模試、通信添削と、大学入試のためにひたすら努力する。

西高の三年生に「何がしたい？」と尋ねたら、十中七八までは「読書と運動」いう。読書も運動もできかねる秀才、そこに西高生の悲しみも弱さもあるようだ。

## 編集後記

かねがね全会員の願いであった、われわれ白城会の機関誌がここに「白城会通信」と銘打って、きょう、その第一号を皆様方のお手もとにお届けすることになりました。費用の制約もあり、加うるに編集者の不才により、お粗末なものしかできませんでした。お許しを乞うとともに、今後漸次に改良充実せしめて、将来は「通信」から昔のような「会誌」に向上させたい意向でありますので、どうか皆様方の温かい御支援、御指導を賜わりますよう、お願い致します。

空地理事長の「発刊にあたって」のことばに盛られた精神を体して、広く同窓諸兄の心

の通い路たらしめたく願っています。現在の西高生が入学した途端に聞かされることばは「姫中以來の古い、輝かしい伝統」ということばです。その伝統というものは、先輩後輩の間、あるいは同窓間の暖かい人間的な交誼を通じて、ほんとうに実感されるものだと思います。「白城会通信」は、そういう心の交流をめざして誕生したものだ、と言えましよう。

本部として今一番心を勞しているのは、この「通信」がはたして全部無事に皆様のお手もとに届くか、という点です。もちろん本部では会員の消息には敏感であり、御住所の変更を知らされる度毎に書き改めておりますがなおすべてを尽くしかねています。すでに「本部告知板」でお願いましたことですが、ここに改めて御住所の変更や御転任・御結婚・御死亡等のご告知がありましたら、本部まで御一報下さるよう、お願い申し上げます。

また、この第一号では白城会並びに母校の現状や問題点を特にとりあげたため、本部理事の方によく執筆の労を煩らわしました。ここに厚く御礼申し上げます。今後は、広く同窓諸兄の間を歴訪して稿を依頼しなくてはなりませんので、どうかよろしくお願い致します。(なお、本「通信」は、目下のところ、毎年七月刊行の予定です。 橋義康)